

協同組合の社会調査からみえてきた 新しいコミュニティ

佐藤 慶幸 (早稲田大学名誉教授)

早稲田大学文学部社会学専修では3年度生は社会調査実習を必修科目として履修しなければならない。担当教員はフィールドの選定には苦勞するが、当然のこととして担当教員の専門研究領域に関連するフィールドが選ばれることになる。私の場合は、アソシエーション論の文献的理論的研究をすすめて拙著『アソシエーションの社会学』（1982）を出版していた。ある研究会でアソシエーションについて話をしたとき、その会に生活クラブ生協の職員の人々が出席しており、彼と話を交わすことで協同組合はアソシエーションではないかと認識したのである。この生活クラブ関係者との偶然の出会いによって、生活クラブ生協とのラポールができ生活クラブ生協を学生の社会調査実習のフィールドとすることができたのである。こうしたいきさつによって私のアソシエーション研究は生活クラブ生協の実証的な研究へと進むことになった。

このようにして、生活クラブ生協を学生の調査実習のフィールドとしたことを契機にして、院生、同僚研究者が生活クラブ生協の調査研究に参加し、数年にわたって生活クラブ生協の研究を続けた。その共同研究の成果として『女性たちの生活ネットワーク』（1988）、『女性たちの生活者運動』（1995）を、そして佐藤の単著として『女性と協同組合の社会学』（1996）を出版した。

生活クラブ生協は、専従職員とパートナーシップを組む家庭の主婦を主体とする消費者生活協同組合である。生協運動は、生活クラブの場合、〈生産する消費者運動〉として特徴づけられる消費材の供給を生産者との社会契約によって持続し拡大する社会運動である。その組織が予約共同購入システムである。このシステムを効果的にかつ効率的に組織するためのアソシエーションとして協同組合が形成されている。そして、この予約共

同購入システムが、経済的下部構造を形成し、生協運動とそれを基盤にして行われる社会活動・運動に必要ないっさいの諸経費を創出しているのである。運動と事業はあざなえる縄のごとく一体となっている。

しかし、以上の予約共同購入システムを基盤にしながら、生活クラブ生協の活動の基礎単位が時代の変化に対応して〈班〉から〈個人〉へと組織論的転換をすることになる。その転換は、近隣コミュニティが衰退し、日常生活の私秘化、個人化が進む中での「班の連合組織」から「意志ある個人の連合」への思想的転換でもあった。平均7～8人からなる班は、消費材を班でまとめて発注し、届けられた消費材を班員で分け合う基礎的組織であり、その集合が班別予約共同システムとして生活クラブ生協の経済的下部構造を形成してきた。

しかし経済成長とともに、生活の個人化が進み、また仕事に従事する兼業主婦が多くなるにしたがって、近隣で班を構成することが困難になり、個人を組織の基礎単位とし、その個人に消費材を配送する〈戸配〉が多くなってきたのである。消費材の班別配送から個人別配送（戸配）への変容は、伝統的な近隣コミュニティの衰退を意味していた。しかし同時に組織の基礎単位を組合員個人として、その個人に消費材を戸配によって供給するということのうちに「自立した意志ある個人」像をみいだそうとしたのである。そして「自立した意志ある個人」が生協活動に参加することによって、多様な生活領域で人的交流のネットワークを形成し、新しい市民的コミュニティ形成の担い手になっている。家族から近隣へ、そして近隣よりも広域的な地域での自立した個人間のネットワークが、生活クラブ生協運動を媒介にして形成されつつある。そしてそのネットワークの担い手は多くの場合、主婦である女性である。

わたしの聴き取り調査法

竹内 洋 (関西大学教授)

わたしはいま戦後日本の思想と社会に関した2つの連載をつづけている。「革新幻想の戦後史」(『諸君!』)に連載していたが、休刊後は『正論』と「メディア知識人の運命 清水幾太郎論」(中央公論新社ホームページ)である。資料のほとんどは、活字で発表されたものであるが、聴き取り調査も平行して行っている。

といっても、対象者のほとんどは故人である。聴き取り調査はできない。そこで、本人の雑文や対談、座談会での発言をできるだけ収集することになっている。本流の論文とはちがった場所であるだけに、おもわぬ逸話やホンネが語られている。たとえば、清水幾太郎の場合は、自分は「ジャーナリストという芸人」といってただけに、サービス精神旺盛で、対談では、自伝などではみられない情報が得られる。生家のとなりが長唄の師匠さんで、長唄が聞こえてくると、親父が「三つ違いの兄さんと」誂いだしていたなどと語っている。聴き取り調査で興が乗り、喋ってくれているようなものである。なによりも清水の生家あたりの空気が生き生きと伝わってくる。わたしはこれを「架空」聴き取り調査と名づけている。

もちろん戦後思想の巨人とお付き合いがあったもと編集者などにも、場所を設定して聴き取り調査を行った。しかし、ボイスレコーダーやノートを前にしてしまえば、相手も構えてしまうことが多い。そんなときに、時間と場所の制約のため、ある知識人と編集でかかわった複数の編集者に一堂に会してもらって、その知識人をめぐる思い出話をしてもらったことがある。同一の話題のせい、座がもりあがり、1人の発言が呼び水になって、「そういえば、こんなこともありましたよ」とか、「いやそうでもないよ」などとドンドン話が展開した。一対一の聴き取り調査よりもリラックスできて、話にも深みができるし、異論もでて、

聴き取りに厚みができたことを覚えている。これを「集合的」面接法と名づけている。

戦後の思想をめぐってのテーマだから、大学関係者や編集者がインフォーマントとなるが、旧知の人も少なくない。パーティで一緒になったり、学会で帰りに一緒になってそうした人と喫茶店に寄ったり、一献傾けることもある。話題はもちろんあれこれだが、そんなときに、タイミングをみて、知りたいことを持ち出すとそれが聴き取り調査になってしまうこともある。ある有名な学生運動家のことをお聞きしたときに、いろいろな逸話を教えてもらったことがある。あとで確かめるために、もう一度電話をしたが、当人はそんなことまで言ったかなあと恥ずかしがっていたが、「彼の家に行ったときのことだから、間違いないよ」といってくれた。あくまで、友人、先輩と久闊を叙すための機会だから、話の流れで聴き取り調査になってしまうのである。ころあいをみて、切り出すのが重要だけれども、無理は禁物である。これを「即興」聴き取り調査と名づけている。もちろん、「即興」聴き取り調査で得られた情報についてはインフォーマントの名前は載せないことにしている。

以上3つの聴き取り調査法は、いずれも、わたしが、必要から編み出した聴き取り法である。社会調査の標準的方法を学ぶことは重要だが、レディメード(標準的方法)を自分流に手直して、自己流を生み出すことが大切と思うのである。